

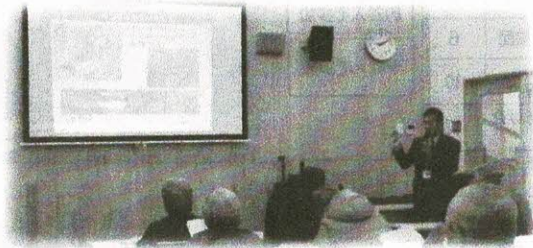
現場を見て聴くことの大切さを痛感する ②

日常が一瞬に壊された実態 苦しみ続けさせられる人々

忘れない そして 連帯を

第9回東日本大震災救援ツアー（日本共産党兵庫県委員会女性後援会）が11月17、19日の3日間実施され31人が参加。206号の報告からの続きです。

宿泊先・いわきスパリゾートに到着後、原発事故当時、病院理事長（129床）・医師として従事しながら、チェルノブイリなどの原発事故にも取り組んでいた伊東達也さん（現原発問題住民運動全国連絡センター筆頭代表委員・原発事故被害いわき市民訴訟原告団長・全国革新懇代表世話人）から、裁判の現状を含め「福島原発事故から8年7か月、被害の現状と課題」の講演（206号掲載）の後、炭鉱からの再生が映画になったフラダンスショーを見学しました。



福島県の漁業実態について、資料を示しながら講演中の神山部長。厳しい基準値をクリアしている実態

水産物の安全と漁業

翌18日は、福島県水産海洋研究センターで、放射能研究部の神山亨一部長から「福島県水産物の安全性と漁業の復興状況」について、詳しい資料を使って説明を受けました。相馬双葉地区は底引き網などの沿岸漁業が盛んな地域、いわき地区は沿岸漁業と沖合

汚染土のフレコンバック



並べられた太陽光パネル

放射能汚染への風評被害は正への検査・取り組みは、漁港として県基準以上に厳しく設定し努力されています。検査結果では、99.5%が「不検出※」ですが、更なる風評対策が必要と取り組んでおられます。

厳しい検査実施

震災・原発事故で約823億円の被害を受け、施設の復旧は進んでいるものの漁獲量は事故前の15.5%にとどまっていること。

許されない汚染水海洋放出

しかし、経済産業省は東電で保管している放射性物質トリウムを含む処理水の海洋放出を推進しており、地元漁業関係者は更に風評被害がひどくなると反対されているようですが当然です。また、漁業従事者は6割程度まで戻っているようですが、後継者の問題、他所から水揚げされたものを使っているなどの課題も山積んでいます。

現場は、どうかして元通りの漁業に戻りたいと懸命な努力をされ、汚染水放出に強く反対しているにも関わらず放出を強行するなんて絶対に許せません。

検出下限値8ベクレル

未だ終わりが見えない

その後、常磐道を北上。富岡・大熊・双葉・浪江・小高町を走りましたが、まだ帰還困難区域が残されています。「2.5マイクロシー

測定地点	放射能値
01	0.1
02	0.3
03	0.6
04	0.6
05	2.7
06	0.6
07	1.2
08	0.3
09	0.1

常磐道で表示されている放射能の値



ここまで水が来たそうです。



岩淵とも参議院議員 大沢たつみ元参議院議員と一緒に

お土産で地元へ貢献

高速道路からは、太陽光パネルが張り巡らされている広大な田んぼ。黒いフレコンバックが野積みされている場所が見えます。まだまだ終わりが見えない原発事故。しかし、この汚染土壌も農地に漉き込みもうという案が出されています。

汚染水や汚染土は、見えなくなれば終わりではありません。私たちの子どもや孫、次代を担う人達に責任をもつ大人としての役割を果たすこと、原発ゼロができるように、今自分のできることを取り組もうと感じています。

エネルギーを充電

大人の責任を果たす

ツアーでは、勉強会や懇談会、現地へ本当に勉強になる企画を組んでいただいております。最後の夜の皆さんの感想でもありましたが、「ここにきて、見て、聴いて、次につなげていきたい」

被ばく者です～核は平和利用だから良いと容認してきた。54基の原発、この事故、悔やんでも悔やみきれない。現地の方の話を聴くことは大切。原発、原爆をなくすことが必要。赤紙配りの時には、広島



おつかれだち

取り組んでくださった安武ひろ子委員長（元参議院議員）が、今夏お亡くなりになり、誰もが寂しく感じているところですが、その志をしっかりと受け継いで「福島を忘れず、原発ゼロを目指す取り組み」を担ってほしいと思います。

（参加者の感想より）